

# わかやまNIEだより



Newspaper in Education

第26号

2026.2 和歌山県NIE推進協議会

事務局:〒646-8660 和歌山県田辺市秋津町100 紀伊民報社内 TEL.0739-24-7171 FAX.0739-25-3094 E-MAIL:nie@kiiminpo.jp

## NIEの活動を通じた防災・減災教育の実践 —神戸の取り組みから学ぶ—

和歌山県NIE推進協議会会長 和歌山大学教育学部教授 船越 勝

昨年度の京都大会に引き続き、2025年7月31日〜8月1日に、神戸市で開催された第30回NIE全国大会神戸大会に参加して来ました。この大会は、阪神淡路大震災30年の年に当たり、大会初日、神戸ポートピアホテルポートピアホールで開催された全体会では、「時代を読み解き、いのちを守る」というテーマにふさわしく、芥川賞作家小川洋子氏の「言葉は人をつなぐ」やジャーナリスト池上彰氏を司会とした4名のパネリストによる、「情報で、いのちを守る」をテーマとしたシンポジウムなど、学ぶことの多い内容でした。そのなかでも、大会実行委員長の竹内弘明氏による基調提案は、短い時間ではありましたが、震災以降神戸でどのような取り組みが行われて来たのか、その教訓は何か、NIEはどのような役割を果たしたのかを簡潔に取りまとめたもので、神戸での官民一体によって進められてきた防災や減災の取り組みの成果がよくわかるものでした。

大会2日目、甲南大学岡本キャンパスで開催された分科会プログラムでは、私は、兵庫県立須磨友が丘高校の実践発表「社会への関心を育み地域や児童と共に学び合う防災教育」に参加し、講師を務めさ

せて頂きました。この実践は、朝読による新聞学習や兵庫県NIE推進協議会主催「記者派遣事業」などでNIEの活動を学んで来た須磨友が丘高校の高校生たちが、これまで地域で連携・協働を積み重ねてきた近隣の神戸市立横尾小学校との小高連携授業で、阪神・淡路大震災と能登半島地震が起きた当時の2つの新聞記事を用いて、「防災ジュニアリーダー」を中心として進めた防災授業でした。2月5日に横尾小学校で開催されたこの防災授業を私もゼミ生3名とともに参観させてもらうことができましたが、最初に、「防災ジュニアリーダー」が行ったPPでのプレゼンテーションを初めとして、中盤での横尾小学校の小学生のグループワークでの高校生のファシリテーションと、ポスタイトを使った発表用のポスターの作製の支援、最後にまとめとして、横尾小学校の小学生たちのポスター発表と、両校による学びの蓄積が十二分に感じられる防災授業の実践でした。分科会では、須磨友が丘高校のこつした学びと実践が高校生自身の発表も含めて報告され、多くの参加者から質問が出されるなど、大きな反響を呼ぶものでした。

しかし、2月5日の防災授業の当日には、この分科会での実践発表では報告されなかった大事な学びが行われたと私は考えています。それは、防災授業の後、須磨が丘高校の高校生と参観した学生と私、及び新聞記者の皆さんとの交流が行われたことです。和歌山大学の学生は、和歌山県に南海トラフ地震が起こったら大きな被害が受けることが想定されていることもあり、防災・減災については大きな関心を持っています。なかには、和歌山大学災害ボランティアアスリート「むすぼら」に所属し、日常的に防災・減災に問題意識を持って取り組んでいる学生もいたので、専門家である記者の方からのアドバイスも含めて、率直な意見交換となりました。これは高校生たちにとっても、自分たちの活動を大学生や記者の方から意味付けてもらえる貴重な機会になったし、大学生にとっても改めて自分たちの課題を意識化する機会になりました。ウィン・ウィンの学びになりました。

この防災授業から学ぶべき点は3つあると思います。第一は、地元神戸で起こった阪神淡路大震災と、最近起こった能登半島地震の2つ新聞記事を取り上げて、両者を比較しながら「避難所で困っていること」での共通点や、どのような支援が求められるのか、さらには「自分たちはどのような備えをしておくべきか」について学びを深めたことです。第二に、教師が教えるのではなく、先行して防災・減災を学んで来た高校生の「防災ジュニアリーダー」が教師役をして、地域の小学生と学び合う実践が「小高連携授業」として積み上げられて来たことです。第三に、こつした取り組みをした高校生や小学生は、学校の他の友だちや保護者ともこの授業で学んだことを語り合うことを通じて、防災や減災に取り組む地域そのものを創り出していくことにつながることで、このような防災・減災に取り組む主体として地域を育てていくことが、防災・減災のための共助・自助を太らせ、公助の確固たる基盤になるのだと考えます。NIEの学びは、そうした地域づくりにも大きな役割を果たすことが確かめられた実践発表でした。

和歌山県でも、家庭での対話も含めて、NIEを通して、こつした防災・減災に向けての取り組みをさらに進めていく1年にしたいですね。

和歌山市立伏虎義務教育学校 田村 竜士

2025年度7月に和歌山大学附属小学校で開催されたNIEセミナーに参加させていただいた。前半部分では大阪・関西万博を題材にした新聞活用授業の実践」という題で、和歌山大学教育学部附属小学校から平井千恵教諭、宮脇隼教諭、矢出大介教諭による実践発表があり、それぞれの発達段階に合わせた工夫を学ぶことができた。後半部分では、「新聞記事の作り方」という題で、毎日新聞社の辻加奈子記者から講話があり、教師が知りえないような情報や苦勞話などを交えながらお話を聞かせてもらった。

NIEとの出会いはもう10年ほどになる。初任校では全校で「いっしょに読もう、新聞コンクール」に積極的に取り組んでおり、私は初めて「新聞を活用した教育」に興味をもった。「新聞を活用した教育」というと、一般的に高学年のイメージがあるように感じる。私も以前まで同じイメージを抱いていた。実際に、和歌山市の小学生で新聞社に見学へ行くのは5年生で、

「みんなが新聞を作ろう(東京書籍)」は4年生、「新聞記事を読み比べよう(東京書籍)」は5年生それぞれ教科書に掲載されている。新聞には、「信頼性の高い情報が毎日手に入られる」「自分と社会を結びつくることができる」「活字に慣れ、読解力の向上を見込める」等の新聞の魅力をたくさん感じていた私は、どの学年でも授業に活かすことができなかつた。

そこで、「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編」を見てみると、新聞に関する記載はないことに気付き、「新聞活用は高学年」はあくまで固定観念で、「低学年でも新聞活用をすればいいのでは」と考え、授業をデザインした経験がある。その際大切にしていたことが2つある。1つ目は当然ながら、学力向上につながるか、子どもたちの力になるか、である。新聞を活用することが目的になってしまつたと本末転倒である。新聞はあくまで手段であり目的ではない。新聞ありきで考えないようにした。2つ目は新聞を活用することで新

聞に興味をもつこと、である。「小学生から『新聞』を読む子は大きく伸びる」(池上彰 すばる金色)によると、「感性系の読書をするだけでは身につくづらい論理的な読解力も、新聞を読むことで養われます。」とある。これはつまり、小説だけでは身につかない読解力を、新聞で補うことができる、ということである。

教科書教材だけでは身につかない資質能力を負担感無く緩やかにつけていくことを考えながら行った実践を例に挙げていく。

①ミリーのすてきなぼうし(光村図書2年上)(国語科)

この学習では、文章をしつかり理解できているかを図るためにクイズ作りに挑ませた。クイズ作りのいい点は2つ。1つ目は主体的に読解できることである。クイズを作るためには何度も文章を読む必要があり、主体的に読解しようとするのである。2つ目は相手意識が生まれることである。作る側からすると相手に伝わるように作らなければ意味がないし、解く

側も「友達の仕事したクイズを解く」という特別感があるので意欲的になれる。しかし、クイズを初めて作るには元の文章としてはハードルが高い。そこで新聞を活用し、文からクイズを作る練習をしていくことにした。新聞には様々な記事がある。1面いっぱい使う内容もあれば、5000文字程度のものも。また、世界のニュースもあれば地域のことも。小学校2年生にとつて良いのは当然、少ない文章で身近な記事である。私が当時実践した時に使った記事は毎日新聞の地域欄からで、中身も当時和歌山団体が終わってすぐだったので全員が知っている「きいちゃん」が写っており興味をもちやすく、文章も約300文字だ。狙い通り普段新聞を読まない子供も食らいいつき、新聞を読み、クイズを作っていた。

②自分の成長を振り返り新聞に表そう(2年生 生活科)

生活科の学習で、これまでの自分を振り返り、成長を実感する学習がある。その学習に新聞にまよめる活動を取り入れた。理由は3つある。1つ目は新聞の利点の1つである、一目で何が大事なかが分かることである。子どもたちには割付を4か所にサイズと場所を変えて提示している。一番大きなところには「一番自分が伝えた

い年代を書く」という目的を与えることで、ただ内容を羅列するのではなく意識しながらまとめることを狙った。2つ目は「見出し・写真などの効果」を活用することで、新聞の特徴として、文字の大きさをや向きを変えている「見出し」が書かれており、一目で何が書かれているかが分かるようになっていく。また文字だけではなく、写真を活用して目を留ませることを狙っていたりする。今回のまとめる活動の際も見出しや写真を活用することで、見る人に伝わりやすくなることを狙った。そして3つ目に「取材」の効果である。子どもたちが成長を振り返るためには、親族を含めた周りの人物に聞く必要がある。そこで、インタビューやメモ、写真に撮ったり、資料を集めたり、新聞記者が行う「取材」を子どもたちもすることで、取材から記事を書くという一連の流れが完結し、新聞を書くことに意味がもたれ、主体的に活動に取り組むことを狙った。



# NIE教育とクロスカリキュラムによる言語活動の深化

## —小倉小学校5年生の実践から—

和歌山市立小倉小学校 梶本 久子

本校5年生では、新聞を活用したNIE教育を、国語科・社会科・総合的な学習の時間と関連づけ、クロスカリキュラムとして年間を通して実践している。新聞を教材として取り入れることで、情報を主体的に読み取り、整理・比較し、自分の言葉で社会に発信する力の育成をねらいとしている。NIE教育は、情報活用能力の育成、批判的思考の涵養、メディア・リテラシー教育としての意義をもち、言語活動を社会的実践へとつなぐ重要な手がかりとなっている。

4月は新聞の基本的な読み方や記事構成を学び、新聞スクラップ活動を開始した。教員が「同じ事柄でも新聞社によって伝え方が異なる記事」や「学習内容と関わる記事」を日々紹介し、図書館に掲示している。子供たちは見出しや写真から情報を読み取る力を養い、記事への関心を高めていった。5月には新聞工場を見学し、新聞づく

り。6月には取材メモをもとに「社会見学新聞」を作成し、見出し・構成・レイアウトの工夫を通して伝える力を高めた。7月には完成した新聞を掲示し、地域や保護者に学びを発信した。国語科「新聞記事を読み比べよう」では、記事の構成や写真の役割、意図が伝わる表現の工夫を学び、次の新聞作成への意欲につなげた。

9月には地域の陶芸体験を題材に取材活動を行い、地域文化や伝統を自らの視点で記事化した。今年度は和歌山県NIE研究会の協力により「朝日小学生新聞」「毎日小学生新聞」「読売KODOMO新聞」の3紙を2か月間購読している。子供たちは日々のスクラップ活動を通して国内外の出来事に関心をもち、記事を比較しながら多角的に考える力を育てている。10月には「陶芸新聞」を完成させ、地域の祭りで展示した。

10月31日には読売新聞和歌山支局の辻阪光平支局長を招き、取材

や記事作成の講座を実施した。インタビューのコツや見出しの考え方など、記者としての経験を交えたお話に子供たちは引き込まれ、「伝える目的を明確にすること」の大切さを学んだ。その後、自らテーマを決めた「○○新聞」づくりに取り組み、国語科の報告文やインタビュー記事の学習と関連付けて表現力を高めた。12月には完成した新聞を互いに読み合い、表現のよさを認め合いながら改善を重ねる姿が見られた。

本校の研究テーマ「ことばの力を育てる」に基づき、NIE教育で培った表現力や言葉を大切にす

る姿勢を生かして、小倉和歌の制作・発表にも取り組んでいる。「和歌こころのたねカード」誰でも歌人になれるプロジェクト（筆者監修）を活用し、地域の魅力を多面的に発信する活動へと発展している。地域を題材とすることで、子供たちは自らの生活と社会を結びつけ、表現を通して地域アイデ

ンティイを形成する姿が見られた。

1月から2月にかけては、一年間の学びを振り返り、個人新聞や学級新聞づくりを行う予定である。国語科の「意見文を書く」単元と関連づけ、社説風の記事として自分の考えをまとめていく。3月には新聞コンクールへの応募や下学年への引き継ぎ発表を行い、学びの成果を次年度へとつなげる計画である。

新聞を活用したNIE教育は、単なる記事作成にとどまらず、子供たちが社会の出来事に主体的に関心をもち、自分の言葉で考えを発信する実践的言語活動として機能している。また、国語科・社会科総合的な学習をつなぐクロスカリキュラムとしての展開によって、教科学習の深化と地域理解の広がりが相互に生まれている。特に、情報を収集・選択・再構成する過程が、言語活動の中心に位置づく「考える言葉」と「伝える言葉」の相互作用を生み出した点が注目される。子供たちは「伝えることの楽しさ」「知ることの喜び」を実感しながら、社会とつながる学びを体験している。今後は、新聞というメディアを核にした探究型学習の体系化を図り、地域素材と情報教育を統合した新たな言語活動の可能性を探っていききたい。



# 第16回

# 「いっしょに読もう！ 新聞コンクール」の審査結果について

## 全国奨励賞

大桑 奈穂さん(和歌山市立高松小学校6年)

藪前 咲希さん(日高郡日高川町立川辺西小学校6年)

吉田 妃凜さん(開智中学校1年)

児島 佳奈さん(県立日高高等学校附属中学校2年)

## 学校奨励賞

和歌山市立高松小学校

日高郡日高川町立川辺西小学校

開智中学校

和歌山県立日高高等学校附属中学校

和歌山県立和歌山東高等学校



※写真掲載は保護者の了解を得ています

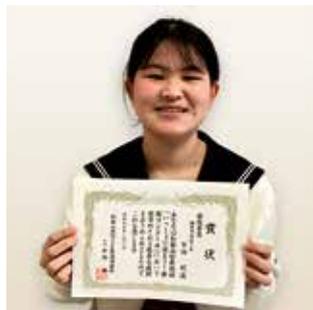
このたび日本新聞協会から、第16回「いっしょに読もう！新聞コンクール」全国審査会の結果が公表されました。全国から6万1,428編の応募があり、小・中・高校部門の最優秀賞を各1編(合計3編)、優秀賞を校種別に各10編(合計30編)、奨励賞を120編選んだと発表がありました。また、団体応募校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各校の合計15校、学校奨励賞184校が選定されています。

和歌山県内では、小学校278編、中学校369編、高等学校95編で合計742編の応募がありました。そのうち県審査会において、優秀賞に40名、奨励賞に77名を選定しました。

全国審査会で授賞された個人および団体、県審査会で授賞された個人の皆様、誠にありがとうございました。また、第17回「いっしょに読もう！新聞コンクール」は2025年9月8日から2026年9月7日までの新聞記事を対象にして実施され、作品の提出締切りは、2026年9月8日(火)です。多くの学校、多くの児童・生徒の皆さんの参加をお待ちしています。なお、当コンクールは県内の多くの応募校が、学級や学年単位で参加してくださっています。授業での作文指導の実際や新聞記事を選ばせる方法など興味のある教員の方々は、参考資料や冊子、当コンクールへの応募用紙や応募書類をお送りしますので、事務局メールアドレス(nie@kiiminpo.jp)にて、ご希望の内容や質問をお書きの上、お送りください。



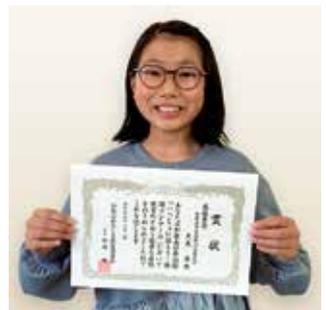
児島 佳奈さん



吉田 妃凜さん



藪前 咲希さん



大桑 奈穂さん

©和歌山県NIE推進協議会

## わかやま デジタルがべ新聞パーク

県内の各学校で作られた学習新聞、かべ新聞や調査研究ポスターなどを公開しています。

### 第2期 作品募集中 (3月末まで)

児童生徒が授業で作成した、かべ新聞、学習新聞、調査研究ポスターなどを募集しています。授業で作成した児童生徒作品を、学年運営や学級経営の記録として、ウェブ上でいつでもどこでも鑑賞できるようにしてみませんか。「わかやまデジタルがべ新聞パーク」は、そのような「デジタル作品展示会」の会場をウェブ上で提供しています。興味のある教員の皆様は、下記アドレスをご覧ください。たくさんの作品の応募をお待ちしています。

[https://nie.kiiminpo.jp/wall\\_news\\_form/](https://nie.kiiminpo.jp/wall_news_form/)